“Winter tames man, woman, and beast”— *The Taming of the Shrew* における Petruchio の成長

村上世津子*

（平成２１年１０月３０日受理）

“Winter tames man, woman, and beast”:
Transformation of Petruchio in *The Taming of the Shrew*

Setsuko MURAKAMI*

While the transformation of Katherina has often been discussed among the critics, that of Petruchio has rarely been discussed. But Petruchio also changes through “being Kated”. Though his aim of marriage was “to wive it wealthily,” he comes to wish to have a chat with a “lusty wench”. Contrary to his prediction, Petruchio’s “peremptoriness” cannot easily defeat Katherina’s “proud-mindedness”. When he tries to prevent her from leaving, he is struck by her. Losing temper, Petruchio shouts, “I swear I’ll cuff you if you strike again,” and is shouted back, “If you strike me, you are no gentleman.” Hearing her words, Petruchio learns the importance of withholding violence and henceforth his taming is done under the name of “in reverent care of her.”

In order to tame her, Petruchio must suffer from the coldness of foul ways, fasting, and no sleeping together with Katherina. Through his suffering he comes to know the wrong he has done others. On his way back to Padua he apologizes Vincentio, a patriarch, and is becoming ready to accept convention. Quite contrary to his subversive attitude at his wedding ceremony, he “sits and eats” at the banquet at the end of the play.

key words: Petruchio, Katherina, transformation

はじめに

New Cambridge の introduction によれば [1] *The Taming of the Shrew*（以下 *The Shrew* と略する）は舞台では人気を博してきたが批評家たちの間では無視に近い扱いを受けてきた．というのも多くの批評家たちが Shaw と同様に [2] 妻を夫に服従させる Petruchio の強引なやり方が野蛮で不快感を催させると感じてきたからである．この不快感に対処する１つの方法は *The Shrew* を farce と見なすことだったので *The Shrew* の性格批評はとりわけ人気がなかった．

* 英文学　准教授

しかし近年は *The Shrew* と Shakespeare の全作品との調和を図るために *The Shrew* を和らげる試みがなされてきた．近年は Katherina を "fiend of hell"[3] や "hilding of devilish spirit"(2.1.26)と見なす批評家はほとんどいない．Katherina の人物観の変遷に伴い，Petruchio の人物観も変化してきた．すなわち Petruchio は他の shrew-taming plot でよく見られる tamer に比べてはるかに sympathetic だと見なされるようになってきた．近年では副筋の "supposes"の主題との結びつきから Petruchio の一連の一見 sadistic に見える行為は Katherina の中に良き妻になるのにふさわしい素質を "supposes"してそれらの素質を引き出そうとする行為であるとする解釈が主流になりつつある．このような解釈をする代表者の１人は Seronsy であるが彼は次のように述べている：

> Petruchio's method is to suppose. . . or assume qualities in Katherina that no one else, possibly even the shrew herself, ever suspects. . . . His "treatment" is a steady unfolding of her really fine qualities: patience, practical good sense, a capacity for humor, and finally obedience. . .[4]

Ruth Nevo は，Petruchio は teacher だという解釈をさらに一歩進めて psychotherapist であると主張している："Only a very clever, very discerning man could bring off a psycho drama so instructive, liberating and therapeutic as Petruchio's. . . ."[5] Petruchio は therapist だという考えは Malaspina によっても支持されている："Katherine, as we have seen, starts from such a painful situation that her taming could even be read as a kind of rescue."[6]

多くの批評家たちに支持されている解釈は，Petruchio は彼の一連の突飛な行動を通して joke[7]または game[8-10]をしているが，彼の game のやり方を身につけ，彼と一緒に game に参加することによって一種の硬直した状態である shrewishness の殻を突き破ることが Katherina の教育内容だというものである．もちろん教育と liberating power を同一視する解釈に疑問を付す批評家も多い．たとえば Burt は[11]Petruchio の game の目的は対等な関係を作るよりも家父長的な支配を維持することにあると述べている．また Morris は[12]教育には生徒の潜在能力を引き出し，解放するだけでなく鋳型にはめる役目もあると指摘している．そもそも patriarchy と liberty や equality が両立するかは大きな問題であり，この劇の終わりの Katherina の obedience speech が彼女の本心を表しているのかそれとも皮肉なのか批評家たちの間で決着がついていない．このように *The Shrew* の Petruchio と Katherina 観は時代によって変遷してきたし批評家たちの見解は多様であるが，好ましいと感じられるにせよ，嫌悪感を引き起こすと感じられるにせよ Petruchio との出会いを通

して Katherina が変化すること(transformation)は批評家たちの間で共通の認識になっている．それに対して Katherina との出会いを通した Petruchio の変化(transformation)について取り扱っている批評家は少ない．[13-15]しかし *The Shrew* の中で Petruchio とのぶつかり合いを通して変化するのは Katherina だけだろうか．本論文では Katherina との葛藤を通した Petruchio の変化について考察したい．

I.

この劇に Petruchio が最初に登場するのは１幕２場で親友の Hortensio を訪問するときであるが，Petruchio は Hortensio に "I come to wive it wealthily in Padua;/ If wealthily, then happily in Padua."(1.2.72-73)と言う．そして Hortensio から自分なら "a mine of gold"(1.2.88)と引き換えにだって結婚しないほど "intolerable curst/ And shrewd and froward so beyond all measure"(1.2.85-86)であるが大変な金持ちの女性がいるという話を聞かされると父親の名前だけを確認して彼女に求婚すると宣言する．つまり Petruchio の結婚の目的は金目当てであることを明言している．実際，Katherina に求婚するために彼女の父 Baptista を訪問したときも Katherina に求婚に来たという用件を述べると「庭を散歩して食事でもしよう」という Baptista の申し出を「ことは急を要しているし，毎日求愛に来るわけにも行かない」という理由で断り，いきなり "if I get your daughter's love,/ What dowry shall I have with her to wife?"(2.1.115-16)と尋ねる．Baptisita の提示する dowry に納得すると Petruchio 側も widow になった場合の保証を提示して細目を取り決めて契約書を作成する提案をする．Baptista に dowry の条件を聞くときにはたとい形式的にでも "if I get your daughter's love"という条件をつけていたが dowry に納得できるや否や "your daughter's love"は Petruchio の念頭から完全に消える．Baptista に "Ay, when the special thing is well obtained,/ That is, her love, for that is all in all."(2.1.124-25)ということを思い出されても "Why, that is nothing"(2.1.126)と答える．つまり Petruchio が Baptista に dowry の内容を尋ねるときに "if I get your daughter's love"と言ったのは良くても枕詞に過ぎず，ことによっては Baptista の提示する内容に満足できなかった場合に断る口実に使うことを想定した発言かも知れない．いずれにせよ本気で Katherina の love を得ることを考えていないことは明白である．Petruchio にとって求婚とは征服であり mutuality や equality など念頭にない：

> Though little fire grows great with little wind,
> Yet extreme gusts will blow out fire and all.
> So I to her, and so she yields to me,
> For I am rough and woo not like a babe. (2.1.130-34)

しかし金銭ずくだったPetruchioの求婚目的はBaptistaの娘たちの音楽の家庭教師役として彼がBaptistaに差し出したHortensio扮するLitioがKatherinaにリュートで殴られたという話を聞いたときに変わり始める．金銭目当てから意気のいい娘を征服したいという気持ちへの変化である．“tamer”としての本能が刺激されたことは否めないが「彼女と話をしたい」というのはここで初めてKatherina本人に関心が出てきたことを示唆している．そしてここでPetruchioが口にするloveはもはやBaptistaにdowryの内容を尋ねるときに形式的に使った実体を伴わない“love”ではなく自分と対等に話ができる人格を備えた存在に対する興味という意味で“love”を用いている：“I love her ten times more than e’er I did./ O how I long to have some chat with her.”(2.1.157-58)

Katherina個人に対する興味を刺激されたPetruchioは彼女に会う前に彼女を口説き落とす策略を立てる．Katherinaが姿を現すとなれ親しげにKateと呼びかけ，彼女に“They call me Katherine that do talk of me.”(2.1.180)と言われても意に介さずKateを連発して彼女を自分のペースに巻き込もうとするがPetruchioの予想に反してKatherinaはそう簡単には屈さない．２人の間でしばらく舌合戦をした後でKatherinaが話を打ち切って出て行こうとするとPetruchioは“Nay, come again,/ Good Kate, I am a gentleman—”(2.1.213)と言って彼女を呼び止める．KatherinaはPetruchioの“I am a gentleman”という言葉を受けて“That I’ll try.”(2.1.213)と言うと同時にPetruchioを殴りつける．Petruchioの“I am a gentleman”という言葉とKatherinaの“That I’ll try”は同じ行の中に入れられている．Petruchioとの舌合戦に愛想をつかしたKatherinaが“so farewell”(2.1.211)と挨拶して出て行こうとしたのにまだ彼女を引き止めて話を続けようとしたことに対して腹を立てKatherinaがPetruchioの言葉をさえぎって実力行使に出たことを示唆している．

Katherinaに会うまでは彼女の意向など“nothing”であると思い，Baptistaに“But be thou armed for some unhappy words”(2.1.135)と忠告されても“Ay, to the proof, as mountains are for words,/ That shakes not though they blow perpetually.”(2.1.137)と豪語していたのにPetruchioの予想をはるかに凌駕するKatherinaの反撃に会い，Petruchioは平静を失う．PetruchioはKatherinaを捕まえて“I swear I’ll cuff you if you strike again”(2.1.214)と言ってKatherinaを脅す．しかしKatherinaはPetruchioの脅しに屈さない．それどころかPetruchioの脅しを逆手にとって反撃に出る：“So may you lose your arms./ If you strike me, you are no gentleman,/ And if no gentleman, why then no arms.”(2.1.215-17) Katherinaを脅してもだめだと悟ったPetruchioは戦略を修正する．出て行こうとするKatherinaに君こそは理想の恋人だと褒め上げる：

I find you passing gentle,
'Twas told me you were rough and coy and sullen,
And now I find report a very liar,
For thou art pleasant, gamesome, passing courteous,
But slow in speech, yet sweet as springtime flowers.
Thou canst not frown, thou canst not look askance,
Nor bite the lip as angry wenches will,
Nor hast thou pleasure to be cross in talk,
But thou with mildness entertain'st thy wooers,
With gentle conference, soft and affable. . . . (2.1.232-41)

"scolding toungue"でPadua中で有名であるばかりでなく父からも "hilding of a devilish spirit!"呼ばわりされてきたKatherinaにとって「君こそは最高の女性」という褒め言葉は彼女が初めて耳にする彼女に対して向けられた賞賛である. Katherinaが評判に違わないshrewであることは2幕1場でKatherinaに手を縛られたBiancaの解いてくれという哀願を無視して彼女を殴りつけることやKatherinaにリュートを教えようとして彼女の痴に障ってリュートで殴りつけられたHortensioの話やPetruchio自身がKatherinaに殴られることから証明されている. しかしKatherinaは名うてのshrewである一方でその評判をひそかに気に病み, 自分には貰い手がないのではないかと恐れていることも事実である：

Nay, now I see
She is your treasure, she must have a husband.
I must dance barefoot on her wedding day
And, for your love to her, lead apes in hell. (2.1.31-34)

巧妙にもPetruchioはKatherinaを賞賛する言葉だけを口にするのではない. 賞賛の言葉の前に世間でのKatherinaの悪評— " 'T was told me you were rough and coy and sullen"—に言及した上で世間一般のKatherina評に反するPetruchio自身のKatherina評という形でKatherinaを褒め上げる. Katherinaにしてみれば弱みを突く言葉を聞かされたので立ち去ろうとする心の動きが鈍る. Katherinaの心的変化を見て取ったPetruchioはKatherina賞賛の軌道を修正する. Katherina賞賛の外観を維持しつつも内容は「最高の恋人」に対する賞賛から「馬か何か」に対する褒め言葉に急降下する. そして根も葉もない世間の噂を作り上げて世間ではKatherinaはびっこだと噂されているが自分が見たところKatherinaの足はすらりと伸びているように見えるか

ら歩きぶりを見せて確かめさせてほしいと注文する．立ち去ることはすなわち Petruchio の注文通り彼に彼女の歩きぶりを見せることになるから Katherina は立ち去ることができない．代わりに “Go, fool, and whom thou keep’st command”(2.1.247)と言う．

もし Katherina がこの地点で完全に Petruchio に愛想をつかしていたなら Petruchio の注文に答えることになろうとならなかろうとさっさと立ち去ったであろう．そうしないのは Katherina の心の中に少なくとも Petruchio の巧みな言葉使いに対する関心が芽生えているからである．Petruchio は Katherina の “Go, fool, and whom thou keep’st command”という言葉の中に彼に対する関心の芽生えとまだ自分のものになっていない Katherina を馬扱いして彼女に “keep’st command”することによって彼女の心を失う危険性を同時に察知する．そこで Petruchio は Katherina を口説き落とすための軌道を再度修正して今度は Katherina を月の女神 Diana にたとえる．Petruchio に “Where did you study all this goodly speech?”(2.1.252)と尋ねるときの Katherina のセリフにはもはや立ち去ろうとするのを静止されて苛立って Petruchio を殴ったときのような刺々しさは感じられない．Katherina との距離が縮まったのを感じた Petruchio は彼女の “[you have just enough wits] to keep you warm”(2.1.255)というセリフの “keep you warm”を強引に “in thy bed”(2.1.256)でと解釈して一気に本題に入る：

> Thus in plain terms: your father hath consented
> That you shall be my wife, your dowry ’greed on,
> And will you, nill you, I will marry you. (2.1.258-60)

この後の Petruchio の強引な押しを見れば Petruchio は結局 Katherina との出会いで全く変化しておらず Baptista から Katherina の dowry を聞くや否や彼が宣言していたように結婚なんて peremptoriness で押しさえすれば相手の意向など何とでもなるものだと思っているかのように見える．しかし果たして本当にそうだろうか．

II.

Petruchio が “will you, nill you, I will marry you”と言った直後に Baptista が Gremio と Tranio(Lucentio)を伴って登場する．Baptista の姿を見ると Petruchio は Katherina に “Here comes your father. Never make denial”(2.1.268)と言う．Petruchio の命令にも拘らず Katherina は Baptista に自分が気違い男と結婚することを望んだ父としての「思いやり」に対して怒りをぶちまける．Katherina の怒りに満ちた訴えを聞いた Petruchio は “If she be curst, it is for policy”(2.1.281)であり２人の間で意思疎通がうまくいかないどころか，意気投合したので次の日曜日に式を挙げることに決まったと

言う．だが舌合戦をしているときに Katherina の関心をひきつけるのに功を奏したハッタリも結婚を前提とした話となると何の効果も示さない． “upon Sunday is the wedding day”(2.1.287)という Petruchio の言葉を耳にするや Katherina は “I’ll see thee hanged on Sunday first!”(2.1.289)と叫ぶ．Katherina の明白な拒否反応に Gremio と Tranio(Lucentio)は Petruchio と Katherina の結婚は脈なしと判断するが Petruchio は彼らの反応に動じないで “ ’Tis bargained ’twixt us twain, being alone,/ That she shall still be curst in company”(2.1.291-94)と言い放つ． Katherina は Petruchio のこのセリフを聞いてもはや何の抵抗も示さない． New Cambridge の注によれば[16]通常彼女が押し黙ったままなのは “ ’Tis bargained ’twixt us twain, being alone,/ That she shall still be curst in company”という Petruchio の言葉が Katherina から反撃する言葉を奪ったからだと解釈されている． 実際ほとんどの演出で Katherina は怒りに燃えつつも反撃できないで焦れている． しかし問題は反撃しないことではない． Katherina が Petruchio の主張を裏付ける行為をすることである．

“I will unto Venice,/ To buy apparel ’gainst the wedding day,/ Provide the feast, father, and bid the guests.”(2.1.303-305)という Petruchio の言葉を聞くと Baptista は半信半疑ながらも “I know not what to say, but give me your hands.”(2.1.307)と言う． もともと Baptista にとって Katherina は厄介者であった． shrew の悪名高き娘の貰い手などそう簡単に見つかりはしないから相手が少々変人でも求婚者がいれば結婚させてしまいたいという気持ちが働くのは当然であろう． 同席している Gremio と Tranio(Lucentio)は Katherina が結婚してくれない限りは Bianca に求婚するチャンスさえ与えられないのだから Petruchio の主張に与するのは当然である． しかし Katherina にとってこれらの不利な状況を考慮に入れてもなお父に “give me your hands”と言われたときに何故素直に手を出すのか疑問が残る． エリザベス朝では男女が証人の前で手をつなぐ行為は現代の婚約よりも拘束力のある “precontract”の成立を意味した．[17]だから Petruchio と Katherina が手をつなぐのを見て Baptista は “God send you joy, Petruchio! ’tis a match.”(2.1.308)と言うし， Gremio と Tranio(Lucentio)は “Amen say we. We will be witnesses”(2.1.309)と言うのである． Katherina は当然証人の前で手をつなぐことの意味を知っていただろう． それなのにどうして手を差し出すことを求められたときに抵抗の素振りさえ見せないのだろうか． 婚約が成立した後で Petruchio に “kiss me, Kate”(2.1.313)と言われても Katherina は応じないし New Cambridge のト書きでは Petruchio と Katherina は別々のドアから退場することになっている．しかし婚約が成立してしまってから抵抗しても遅いのである． そんなことをしてもそれこそ “ ’Tis bargained ’twixt us twain, being alone,/ That she shall

still be curst in company”という Petruchio の言葉の正しさを裏付けるだけである.

なるほど“ ’Tis bargained ’twixt us twain, being alone,/ That she shall still be curst in company”と言われれば抵抗しても“policy”と見なされるだけかも知れない. しかし 279 行目から 287 行目までの Petruchio のセリフと 291 行目から 305 行目までの Petruchio のセリフを比べてみると若干の言葉の違いがあり後者の方がより詳しく述べられてはいるが基本的に Petruchio が言っていることは同じであり, 様式にも違いはない. 問題の“ ’Tis bargained ’twixt us twain, being alone,/ That she shall still be curst in company”というセリフも“If she be curst, it is for policy”という言葉と大差ない. “If she be curst, it is for policy”という言葉にも拘らず“I’ll see thee hanged on Sunday first!”と Katherina が叫んだときには Gremio も Tranio(Lucentio)も“we have ’greed so well together/ That upon Sunday is the wedding day”という Petruchio の言葉を信じなかった. 厄介払いをしたいと思っている Baptista もこの地点ではさすがに Katherina が Petruchio の求婚の申し出を了承したとは思っていない. *Romeo and Juliet* の Capulet と異なり Baptista は Katherina の意に反してまで彼女を Petruchio と結婚させようとは思っていない：“Ay, when the special thing is well obtained,/ That is, her love, for that is all in all.”とするならば“give me your hands”と Baptista が言ったときにもし Katherina が頑強に手を差し出すことを拒んでいたなら婚約は成立しなかったのではないか. “I’ll see thee hanged on Sunday first”と言うときの Katherina の声は既に小さくて体面を保つために言っているに過ぎないという Ralph Berry の見解[18]に反してこの地点で Katherina が Petruchio の結婚の申し出をすんなり受け入れるほど Petruchio を愛しているとはとても言えない. それどころか Petruchio の押しの強さに辟易さえしている. しかしその一方で先述した通り Katherina の心の片隅には Petruchio に対する関心が芽生えている. さらには Bianca の手を縛り彼女を殴った場面では父にかわいがられ数多の求婚者に囲まれている Bianca に対する嫉妬心と生涯独身で通さなければならないかも知れない自分の境遇に対する不安を述べていた. とするならば証人の前で Petruchio と手をつなぐことの重みを十分に理解しつつも, そうすることを拒みはしないのは shrew の悪名高い Katherina にとって結婚できるおそらく唯一のチャンスを完全に放棄することの怖さが彼女の心の中に潜んでいるからではないだろうか. Petruchio を拒む彼女の心の 99%の中に Petruchio に対する関心の芽生えや生涯独身の恐怖の不純物が 1%混じる. この 1%が Katherina に手を差し出すことを求められたときに拒めなくしたのではないだろうか.

Katherina と結婚するには彼女の“love”を得ることが肝心だと Baptista に言われたときに Petruchio はそんなものは“nothing”だと答えた. Katherina

の “proud-mindedness”など彼の “peremptoriness”で簡単に吹き飛ばせると思っていたからだ． しかし Petruchio の予想は何度も修正させられてきた．Katherina に会う前に既に Hortensio から Katherina にリュートで殴られた話を聞かされたときに彼の結婚目的が金目当てから “lusty wench”に会って話をしてみたいに変わったし実際に会って話をしてみると本題に入る前に彼女に出て行かれそうになったし， 押し止めると彼女に殴られた． 彼女の予期しなかった行動に平静を失い “I swear I’ll cuff you if you strike again”と言って脅すと「殴ったら紳士ではない」と言い返され Katherina を腕力で押さえつけることはできないことを悟らされた． Katherina を褒め上げて彼女の関心を引き，彼女の関心を失わせないように突然調子を変えて馬か何かにたとえて「歩きぶりを見せてほしい」と言って “Go, fool, and whom thou keep’st command”と言われたときにはまだ自分のものになっていない Katherina に高圧的に命令することの危険性に気づかされて， さらに軌道を修正させられた． ここまで見る限り Petruchio の Katherina 求婚は Petruchio の一方的な押しで進行する彼の予想とはなはだ異なった進展をしている． 父親との話はついているから君の意向に拘らず結婚すると言った後でもまだ “Here comes your father. Never make denial”と言うこと自体， 彼の当初の予想に反して Katherina が断固として結婚の応諾を拒否したら婚約が成立しなくなることを Petruchio が認識していることを示唆している． 以上のような経緯を詳細に検討すると一見 Petruchio の “peremptoriness”が Katherina の “proud-mindedness”をねじ伏せたように見える Petruchio と Katherina の婚約も “peremproriness”だけでは決して成立しえず， Katherina 自身の心の動きとかみ合って始めて成立し得たと言える．

III.

Petruchio と Katherina の mutuality について考えるときにさらに厄介なのが Petruchio と Katherina の結婚式とその後の祝宴である． 婚約が成立したときに結婚式の日時を指定して自分はこれから結婚式のための衣装を誂えに Venice に行くから祝宴の準備をして客を招待するようにと Baptista に言い置いて Baptista 家を後にしたのは Petruchio であった． それなのに Petruchio は約束の時間になっても姿を現さないし， やっと姿を現したときの格好は厳かな式にあまりにもふさわしくない， Petruchio 自身の身分にもかかわるし，Baptista 家にとっても恥となる目障りなものであった： “. . . you come so unprovided,/ Fie, doff this habit, shame to your estates,/ An eye-sore to our solemn festival”(3.2.89-91) Petruchio は Tranio(Lucentio)に遅刻してきた理由と式にふさわしからぬ格好をしてきたことの説明を求められても釈明しないし， “See not your bride in these unreverent robes;/ Go to my chamber, put on clothes of mine”(3.2.102-103)という Tranio(Lucentio)の忠告も無視して “unreverent robes”を着て式に出る． しかし極め付きは式における Petruchio

の態度である．神父がKatherinaを妻にする意志確認をしたときにPetruchioがあまりにも大声で誓ったので仰天して聖書を落とした神父がそれを拾い上げようとしたときにPetruchioは神父を殴ったのである．Petruchioのあまりの醜態にKatherinaは“Trembled and shook”(3.2.157)したし，列席者の1人であるGremioも式が終わり教会から出てきたときは“As willingly as e’er I came from school”(3.2.140)であった．夫になる予定の人の狼藉を見て妻になるべき人が“trembled and shook”する結婚式のどこにmutualityが存在し得るのか考えるのは難しいが，このような結婚の仕方の中にもKatherinaの意志が全く反映されていないわけではない．

式当日なのになかなか姿を現さないPetruchioを苛々しながら待っているときにKatherinaは次のような不平を述べた：

> He’ll woo a thousand, ’point the day of marriage,
> Make feast, invite friends, and proclaim the banns,
> Yet never means to wed where he hath wooed.
> Now must the world point at poor Katherine
> And say, “Lo, there is mad Petruchio’s wife
> If it would please him come and marry her! (3.2.15-20)

KatherinaがPetruchioは求婚して結婚式の日取りを指定して友人を招待して祝宴を催させるが結婚する気のない男だと不平を言うことはPetruchioのことを“a mad-brain rudesby, full of spleen”(3.2.10)と言い，彼との結婚は“opposed against my heart”(3.2.9)と言いつつもPetruchioと結婚したい，彼が姿を現さずに世間の人々に「あれが夫になるはずだった狂人Petruchioに見捨てられた女だ」と後ろ指を差されたくはないというKatherinaの気持ちを表している．[19]面白いことにはPetruchioが姿を現したときにBaptistaとTranio(Lucentio)はPetruchioの“unreverent robes”を非難するがKatherinaが「そのような身なりをした男とは結婚したくない」と主張する箇所はない．

結婚式の場面についても同様のことが言える．Petruchioの狼藉にKatherinaが“trembled and shook”しても彼女が式の進行に異議を唱えた形跡はないのである．Gremioの語りの中には，式の中で神父がPetruchioにKatherinaを妻とすることの意志確認をしたときにPetruchioが“Ay, by gogs-wouns!”とあまりにも大きな声で誓ったから仰天した神父が聖書を落としたほどだったと言う箇所がある．神父が夫となるべき人に夫になる意志があるか確認をしているということは通常の結婚式通り当然妻となるKatherinaにも同様の意志確認をしているはずである．しかしCrosmanの指摘するように[20]Gremioの語りにはPetruchioのあまりにもの狼藉にKatherinaが“I do”と言えないほどだったという箇所はない．Katherinaが“I do”と言わない限り

結婚式は成立しないのだから，たとい Gremio の報告が信憑性に欠けるにしてもこの点に関して報告し忘れることはないはずである．とするならば Katherina は Petruchio との結婚に大いに不満を抱きながらも土壇場で彼との結婚を受け入れていることを示唆している．ちなみにこれは式から戻った Petruchio が祝宴の席についている客たちに急ぎの用があるので皆さんと一緒に会食することができないと言って別れの挨拶をしたときの Katherina の反応の中でも示唆されている．彼女は Tranio(Lucentio)や Gremio とともに Petruchio に祝宴の席に残ってくれとお願いこそすれ「あんな狼藉者と一緒にいるのは恥ずかしい，とっとと帰ってもらいたい」とは言わないのである．

ただし Katherina の懇願にも拘らず Petruchio が彼らの結婚の披露宴にも出席しないことについては話は別である．２幕１場で証人の前で Petruchio と手をつなぐことによって婚約が成立して以来，変人 Petruchio に大いに不満を抱きつつも基本的に Petruchio と行動を共にすることを支持してきた Katherina は “Now, if you love me, stay”(3.2.194)という彼女の頼みにも耳を貸さず Petruchio が従僕の Grumio に馬を用意させるときに婚約以来初めて明確に彼と行動を共にしない意志表明をする：“Nay, then,/ do what thou canst, I will not go today!/ No, nor tomorrow—not till I please myself.”(3.2.196-98) Petruchio の非常識な態度に腹を立てている Katherina は “O Kate, content thee; prithee be not angry”(3.2.204)という Petruchio の懇願にも耳を貸さず Petruchio の意志に反して，集まった客達に披露宴の席に着くように要請する．Petruchio は Katherina の言葉を逆手にとって集まった客達については Katherina の言う通り祝宴の席に着かせるが Katherina 本人は結婚した以上自分の所有物になったのだからその処遇については自分に決定権があり連れて帰ると主張する．そして自分を婦人を守る騎士，Grumio を騎士に仕える従者，披露宴に出席するために集った客達を妻に邪心を抱く盗人に見立てて Katherina を守るためと称して彼女を連れ去る．

そもそも披露宴の用意をして友人や親族を招待するようにと要請したのは Petruchio なのに夫と一緒に披露宴に出たいという妻の明確な意思を無視して妻を連れ去るのは Petruchio の横暴としか表現することができないように思える．この横暴の中に mutuality を見出すのは非常に難しいが，それでもこの場面を仔細に検討すると Petruchio の横暴の中にも Katherina の影響を見て取ることができる．すなわち “Gentlemen, forward to the bridal dinner”(3.2.208)という Katherina の言葉を受けて Petruchio は集まった客達に “Go to the feast, revel and domineer,/ Carouse full measure to her maidenhead,/ Be mad and merry”(3.2.213-15)と言うのである．Petruchio のこの言葉はもちろんこの後に続く「ただし Katherina は自分の所有物なのだから連れ帰る」という言葉の巧妙な前置きであるがそれでもこの前置きの存在は大きい．もし Petruchio のこの言葉がなければ主役 2 人を欠いた披露宴は完全

に台無しになったであろう．台無しになった宴会はホスト役の Macbeth が宴会中に Banquo の亡霊が現れるのを見て取り乱し宴を続けることができなくなり挨拶も抜きに招待客に引き取ってもらった *Macbeth* 3 幕 4 場の宴会を連想させる．Macbeth の宴会はホスト 2 人のうち 1 人が狂態を曝しただけだから新郎新婦が 2 人とも欠席する披露宴は形式的な面から言えば Macbeth の宴会よりもひどい．それなのに陰鬱な雰囲気に陥らずに新郎新婦を欠いたまま宴会が続行できるのは新郎新婦が共に集まった客たちに大いに宴会を楽しんでくれるよう要請するからである．

Petruchio が Katherina を連れ去るときに婦人を守る騎士に扮することも重要である．もちろん Petruchio が騎士の真似をしたからといって誰も騙されない．Petruchio のことをかなりいかれた変人だと思うだけである．しかしもし Petruchio が鞭や剣で脅しつけて Katherina を連れ去ったならその場に居合わせた人たちの反応は全く違ったものになっていただろう．なるほど Baptista にとっては Bianca こそが “treasure”であり Katherina はできることならさっさと厄介払いしたい存在である．しかも Baptista は “treasure”である Bianca でさえもあたかもモノを競りにかけるときのようにより多くの dowry を用意した求婚者に娘をやると宣言するような計算高い男である．しかし彼は冷酷な父親ではない．Petruchio が dowry について合意が得られたから早速契約書を取り交わそうと言ったときには「娘の愛を勝ちうることが肝心だ」と釘をさすことを忘れないし，式当日になってもなかなか Petruchio が姿を現さなかったときには本気で娘のために心配した．本当に娘の身に危害が加えられる恐れがあるときには娘の側に立つ Baptista の気質を考えればもし Petruchio が暴力に訴えることによって Katherina を連れ去ったならば Baptista は抗議をしただろう．実際 Baptista は 206 行目で娘の弁護をするために口を挟もうとして Katherina に制止されている：“Father, be quiet”(3.2.106)そうなれば宴会は Macbeth の宴会と同様に一転して陰鬱な雰囲気に転じただろう．ここで Petruchio が暴力に訴えずに婦人を守る騎士に扮して Katherina を連れ去ることには後述するように Katherina の影響がある．

Petruchio の本来の性格はここで見られるような “frantic fool”(3.2.12)兼 “merry man”(3.2.13)ではない．むしろかなり手の早い男である．1 幕２場で Petruchio が Hortensio を訪問して従者の Grumio に “knock me here soudly”(1.2.8)と命じたときに Grumio が ethical dative の “me”の意味が理解できずに混乱していると Petruchio は Grumio の耳をねじり上げた．また２幕１場で Katherina を口説いている最中に Petruchio の話に飽きた Katherina が立ち去ろうとして Petruchio に制止されたのに苛立って彼を殴ったときには Petruchio は “I swear I’ll cuff you if you strike again”と言った．求婚の場面の間 Petruchio が Katherina を殴らないのと同様に Katherina を連れ去るときにも外見上は決して手荒な手段に訴えずにあくまで婦人を守る騎士に扮するこ

とには Katherina の “If you strike me, you are no gentleman”という言葉が響いているものと思われる． Morris が指摘するように [21]Petruchio はこの後も一貫して *The Shrew* の中で Katherina に物理的な懲罰を加えることはないが， この点において *The Shrew* の Petruchio は taming の主題を取り扱った民話の tamer と異なる．

IV.

Petruchio の taming は Verona の Petruchio の邸宅に着く前から既にその途上で始まっている． Grumio によればぬかるみ道を下って行ったときに Petruchio と Katherina の乗った馬が倒れて Katherina が馬の下敷きになった．すると Petruchio はこのような事態になったのはお前のせいだと言って Grumio を殴った． Petruchio の暴力を見かねた Katherina がぬかるみを歩いて Petruchio を Grumio から引き離しにやってきたが Petruchio は怒鳴るだけで Katherina の哀願にも耳を貸さなかった． Katherina と同様ぬかるみで泥だらけになった Grumio が寒さで “a piece of ice”(4.1.10)になったと言っていることから判断すれば， ぬかるみで泥だらけになることは汚れるだけでなく凍えることも意味している． Petruchio が用意した馬は八百万の病気を抱えている老馬である． そんな馬に乗ってぬかるみを渡らせたら馬が倒れるのは自明である． おそらく Petruchio はこのような事態を引き起こすためにわざとそのような馬を用意したのであろう． しかも Petruchio は馬の下敷きになった Katherina を放っておくことによって Katherina の苦しみを長引かせるのである． Katherina を連れ去るときに集まった客達の前で「婦人を守る騎士」を演じたときのいかれていて騒々しくはあるが， shrew である Katherina の夫にふさわしい陽気な男というイメージから程遠くここでは Petruchio の sadistic な側面が現れている． この場面の Petruchio に Katherina との mutuality を見出すことはきわめて難しいがこの場面を詳細に検討してみると sadistic な前面の背後に見せ掛けでない Katherina への思いやりが存在していることに気づく．

なるほど Petruchio は Katherina が落馬して泥だらけになり寒さで凍えるように仕向けてはいる． しかし Petruchio は彼が Katherina に課した苦しみを自分自身にも課している：

> Grumio: First know my horse is tired, my master and mistress fallen out.
> Curtis: How?
> Grumio: Out of their saddles into the dirt, and thereby hangs a tale. (4.1.38-41)

落馬して泥だらけになり凍えるのは Katherina だけでなく Petruchio も同様である． Petruchio も凍えていることを強調するために Shakespeare は上記に引用した会話の数行前でも Grumio に “*my master* and mistress are almost

frozen to death”(筆者強調, 4.1.26-27)と言わせている. さらには寒さを共に経験したPetruchioとKatherinaがPetruchioの邸宅に着いたらすぐに暖を取ることができるようにPetruchioがGrumioに先に行って火を起こしておくように命じていることも重要である：“I am sent before to make a fire, and they are coming after to warm them”(4.1.3-4) Petruchioはぬかるみで泥だらけになってKatherinaと寒さを共有することを通して暖まるときにも自分だけではなくKatherinaと共に暖まれるように配慮をしているのである.

まだ見ぬ女主人について噂通りの shrew かと聞く Curtis の問いに対するGrumioの答えは興味深い：“She was, good Curtis, before this frost. But thou know’st winter tames *man*, woman and beast; for it hath tamed *my old master*, and my new mistress, and myself, fellow Curtis.”(筆者強調, 4.1.16-18)ぬかるみで泥んこになり寒さに凍えるKatherinaがそのことで喚き立てたり愚痴を言ったりせずにむしろPetruchioに殴られたり怒鳴られたりしているGrumioのために執り成してやろうとすることは彼女が“winter”に“tamed”されたことを示唆しているがPetruchioについてはどうだろうか. 馬の下敷きになってもがいている新妻を助けようともせずにお前のせいでこうなったと言って従者を殴りつけたり怒鳴りつけたりする姿から判断すれば“winter”に“tamed”されたと言うよりも“He is more shrew than she”(4.1.63)と言う方が正しいように思える. しかしKatherinaと共に寒さを経験することを通してPetruchioが, 彼女と共に暖をとることができるように従者を先にやって火を起こさせる配慮を身に着けたとするならば“[winter] hath tamed my old master”というGrumioのセリフは的を射たものになる. New Cambridgeの注によれば[22] “winter tames man, woman and beast”は“Age (or winter) and wedlock tame both man and beast”(Tilly A64)という諺に言及したものである. Grumioがここで「結婚は人を飼いならす」という諺に言及していることはKatherinaだけでなくPetruchioもKatherinaと知り合い, 彼女に魅了され, 彼女と結婚する— Old Gremioの言葉を借りるならば, “Petruchio is Kated”(3.2.234)される—ことを通して“tamed”されることを示唆していて面白い.

V.

Veronaの彼の邸宅に着くとPetruchioは途上のぬかるみ事件のとき以上に暴君ぶりを発揮する. Petruchioは従者たちが出迎えに来なかったと言って怒鳴りつけ, 靴の脱がせ方が悪いと言って殴り, 水をこぼしたと言って殴る. そして召使が持ってきた料理にも“ ’Tis burnt, and so is all the meat”(4.1.132)と難癖をつけて投げつける. Petruchioは召使のために執り成すKatherinaの言葉にも耳を貸さない. Petruchioは口ではKatherinaに対して“welcome”(4.1.113)や“be merry”(4.1.114)と言っているがKatherinaは

Petruchioの邸でとても落ち着くことなんかできない．それどころかぬかるみをずぶぬれになって歩いてきて空腹を抱えているのにPetruchioが料理をぶちまけたので結局Katherinaは一口も夕食を口にすることができない．

Katherinaが奪われるのは食事だけではない．食事と同様にPetruchioは寝具についても片端から難癖をつけて枕もシーツもカバーも投げつけるのでKatherina は眠ることも許されない．１日の疲労を癒し体力を回復してくれる眠りを奪われた Katherina はどっちを向いて立てばいいのか，何を見，何をしゃべったらいいのかもわからなくなって夢から覚めたばかりの人のようにぼんやり座っているだけになってしまう．この場面の Katherina にはもはや１幕２場で Petruchioが Katherinaを口説きに来たときの “lusty wench”としての魅力は完全に失われている．Petruchioは独白の中でKatherinaをfalcon, 彼女を彼の命令に従うように変える訓練法を falconryにたとえている：

> My falcon is now sharp and passing empty,
> And till she stoop she must not be full-gorged,
> For then she never looks upon her lure.
> Another way I have to man my haggard,
> To make her come and know her keeper’s call,
> That is, to watch her, as we watch these kites
> That bate and beat and will not be obedient. (4.1.161-67)

食事と睡眠という生命維持の基本さえ奪い，相手を衰弱させて判断力を失わせて自分の意のままに操ろうとする Petruchioの態度には１幕２場の自分と対等な存在である “lusty wench”と会って話をしてみたいと思ったときの健全な精神のかけらも見られない．またぬかるみをずぶぬれになって歩いてKatherinaと寒さを共有することを通して Petruchioが身に着けたかと思われた思いやりの片鱗もこの場面では見ることができない．Petruchio は Katherina のため― “in reverent care of her”(4.1.175)―という名の下でKatherinaを思いのまま操る手法を総括して “This is a way to kill a wife with kindness”(4.1.179)と言っている．Petruchio のやり方が Katherina を Katherinaらしくしていた “lustiness”を奪い moronのような存在に仕立て直していることを考慮すれば “kill”というのは正鵠を射た表現であるように思われる．そしてそのようなPetruchioの行動はmutualityとは対極に位置するように思える．しかし詳しく検討すれば一見 Katherina の人格を完全に否定するかのように思えるこの場面の Petruchio による Katherina の “taming”の中にも mutualityが存在していることがわかる．

給仕の者が運んできた料理を Petruchioが難癖をつけてぶちまけるのを見た

Katherinaが“The meat was well, if you were so contented”(4.1.140)と言うのを聞いてPetruchioは次のように言う：

> I tell thee, Kate, ’twas burnt and dried away,
> And I expressly am forbid to touch it,
> For it engenders choler, planteth anger;
> And better ’twere that *both of us* did fast,
> Since, of *ourselves*, *ourselves* are choleric,
> Than feed it with such over-roasted flesh.
> Be patient. Tomorrow’t shall be mended,
> And for this night *we’ll* fast *for company*. (筆者強調, 4.1.141-48)

上記に引用したセリフの中でPetruchioが“both of us”や“for company”という言葉を使用していることは重要である. Verona途上のぬかるみ事件でPetruchioはKatherinaに課したのと同じ苦しみを彼自身にも課したがThompsonやE. M. W. Tillyardが指摘するように[23-24]Petruchioはここでも彼自身にも断食の苦しみを課す. ちなみにCandidoは[25]PetruchioがKatherinaに断食を課すのは当時人気のあった医学の手引書に載っていたThe School of Salernoの療法に従っているのかも知れないと指摘している. Petruchioが当時の医学の知識を有していてそれに基づいた療法をKatherinaと彼自身に課していたならば「Katherinaのため」という言葉は単なる名目上の口実でなくなり面白い.

PetruchioがKatherinaと苦しみを共にするのは断食だけではない. 眠りを奪われることについても同様である. Petruchioは寝具についてあれこれ難癖をつけ枕やカバーやシーツを投げ散らかしてKatherinaがベッドで寝られないようにするだけでなく, 彼女が居眠りをすればわめき散らして騒ぎ立てて居眠りできないようにする. 従僕に監視させてKatherinaが眠れないようにするのではなくPetruchio自身が監視するためには彼自身が起きていなければならない. 苦しみを共にするという点においてPetruchioはShakespeareが下敷きにしたとされている民話のtamerと一線を画する. [26]食事と眠りを奪われたKatherinaの苛々は限界が近づきGrumioに不満をぶつけ何でもいいから食べ物を持ってきてくれるようにお願いする：“I prithee go and get me some repast－/ I care not what, so it be wholesome food.”(4.3.15-16)ここでのKatherinaは食事内容に注文をつけないどころか召使に命令するときまで“I prithee”をつけるほど謙っている. そこまで限界に近づいているKatherinaをGrumioがからかって次々にKatherinaの好物の名前を挙げては理由をつけて引っ込めることを繰り返した挙句に“the mustard without the beef”(4.3.30)を提案する. Verona途上のぬかるみ事件以来Petruchioの従者が怒鳴られた

り殴られたりするたびに従者のために執り成してきたKatherinaがここで初めて従者をののしり，殴る．Katherina の我慢の限界を超えたまさにその時にPetruchioが自ら料理した肉を持って Hortensio と共に入ってきて Katherinaに食べるように促して彼女が食べている最中に最高に着飾ってKatherinaの父の邸に戻る話をする．最高に着飾ることについては後述するように反故になるが食事についてはGrumioのようにKatherinaを焦らしてさらに苦しめるために持ってきたのではなく実際に Katherina に食べてもらうために Petruchioが手ずから作って運んできたものである．Katherina の我慢が限界を超えるタイミングを正確に推し測り絶妙なタイミングで食事を運んでくるのはPetruchio自身も Katherina と同じ断食の苦しみを経験してきたからできる技であろう．ここで Petruchio が Katherina の相伴をする Hortensio に傍白で“Eat it up all, Hortensio, if thou lov’st me”(4.3.50)と言っているのは注目に価する．Grumioに食事を持ってくるように頼んだときにKatherinaは「なんでもいい」と言ったが飢えていない Hortensio が Petruchioの作った料理を平らげることはその料理がちゃんとした，おいしいものであることをさり気なくKatherinaにアピールすることになるからである．HortensioにKatherinaの相伴をさせることには他にも効用がある．Petruchio が運んできた食事をKatherina が１人でがつがつ食べる姿が舞台上で提示されると，その食事がどんなに Petruchioが妻のために丹精こめて作ったものであったにしても飼い主が飢えた動物に餌を与えている印象を観客に与えてしまう．Hortensio がKatherina の相伴をして供されたものを残さず食べることによって Petruchioが Katherina に差し出した食べ物が餌から食事に変化する．４幕 1 場の独白で Petruchio は Katherina を falcon に，食事も眠りも与えない彼のやり方をfalconry に，たとえていた．しかし Edward Berry の見解 [27]に反してPetruchioの Katherinaに対する接し方は単なる調教ではない．Katherinaに課すのと同じ苦しみをPetruchio自身も経験し，我慢の限界を超えたときには相手のプライドを傷つけないように相伴を用意した上で手ずから作った料理を差し出すことによって Petruchioは Katherinaの人格を傷つけないように細心の注意を払っているからである．

VI.

Petruchio の “taming”は彼が手ずから作った料理を Katherina に差し出し最高に着飾って Baptista の邸に行こうと提案したときに終わりはしない．食事や眠りと同様にKatherinaが気に入っていてもPetruchioは帽子やガウンに難癖をつけ帽子屋と仕立て屋を追い返し，前言を翻して身体を豊かにするのは精神なのだから今着ている質素な服そのままでKatherinaの父の邸に行こうと提案をし直す．Petruchio 自身が着飾ることを提案し，土壇場で自らの提案を覆すやり方は 2 幕１場で自分はこれから結婚式の日に備えて指輪や衣装を誂えに Venice に行くから披露宴の準備をするようにと Baptista に言い置いて

Baptista 邸を辞したのに式当日には Baptista 家の人たちが “eye-sore to our solemn festival”と思う身なりでやってきて “To me she’s married, not unto my clothes”と言ったことを想起させる．振り出しの言動との類似はVerona途上のぬかるみで Katherina と寒さを経験し，彼の邸についてからも Katherina と共に断食や不眠の苦しみを経験した後でも Petruchio の本質が変化していないことを示唆しているような印象を観客に与える．しかしこの場面を詳しく検討してみるとここでの Petruchio は結婚式の日以前の Petruchio とは１つの明確な違いを示していることがわかる．

２幕１場で Petruchio の Katherina への求婚の成否を確かめに来た Baptista ら一行に対して Petruchio は “If she and I be pleased, what’s that to you?”(2.1.292)と聞くが，求婚から結婚式当日までの Petruchio の行動の基調はまさに結婚は２人のものだから２人の間で合意さえしていれば他の人にとやかく言われる筋合いはないというものであった．Katherina と結婚して彼女を “a wild Kate”(2.1.266)から “a Kate/ Conformable as other household Kates”(2.1.266-67)に仕立て直すことこそ自分の使命だと確信してその使命達成に向けて猪突猛進する Petruchio は Katherina との結婚を強引にもぎ取ることが Baptista に不安を抱かせていることなど考慮に入れない：“Faith, gentlemen, now I play a merchant’s part,/ And venture madly on a desperate mart”(2.1.315-16) Petruchio はまた突飛な身なりで結婚式に出席することが Baptista 家にとって eye-sore になることも考慮しないし披露宴の準備をさせておきながら当の本人はもちろんのこと Katherina までも宴に出さないことが Baptista の心を傷つけるであろうことなど気にもかけない．しかし Petruchiio の傍若無人の真骨頂が発揮されるのは結婚式での彼の言動である．Crosman が指摘するように [28]キリスト教の秘蹟の１つであり，厳かに執り行われるべき結婚式で新郎が神父を殴ったり式後に寺男の顔に酒浸しのケーキ片を投げつけるのは無礼を通り越して神に対する冒涜である．このように彼の言動が周囲の人たちに与えている影響について全く考慮に入れていなかった Petruchio が仕立て屋の場面で始めて仕立て屋に及ぼした影響について考える．Petruchio は Katherina の前ではさんざん難癖をつけて仕立て屋を追い返すが傍白で Hortensio に明日代金を支払う旨を仕立て屋に伝えてくれるように頼む．

帽子屋や仕立て屋が登場する場面ではもう１つ注目すべきことがある．食事も眠りも奪われていたときの Katherina は口数も少なく精彩に欠いていたがここでは自己主張をし，生気を取り戻しつつあることである．この場面では Katherina の主張は一顧だにされない．たとえば帽子を気に入った Katherina が “This doth fit the time,/ And gentlewomen wear such caps as these”(4.3.69-70)と言っても “When you are gentle you shall have one too”(4.3.71)と言って Petruchio に押し切られるだけである．またガウンを気

に入ったKatherinaがこんな素敵なガウンを彼女に見せてそれに難癖をつけるだなんて “Belike you mean to make a puppet of me”(4.3.103)なんでしょと言うと Petruchio は彼女の言葉を曲解して “Why, true, he means to make a puppet of thee”(4.3.104)と言う． このようにKatherinaの主張は押し切られたり曲解されたりするがたとい一顧だにされなくても彼女に発言する権利があることの意味は大きい． Katherina は falcon と違って断食や不眠で衰弱させられることによって “killed”されはしなかったことを証明しているからである．

仕立て屋が退場すると Petruchio は約束通り Katherina の父の邸に向かう．Petruchioが前言を翻して “honest mean habilments”を着てBaptistaの邸に向かうことが結婚式の当日にPetruchioが式にふさわしくない身なりでやってきたことを想起することについては既に述べた通りである． しかし厳密に言えば “honest mean habilments”と “a new hat and an old jerkin. . . a pair of boots that have been candle cases, one buckled, another laced”(3.2.41-43)とは異なる． ここでの Petruchio の衣装は質素ではあっても異様ではない．同様にこの場面の終わりでPetruchioが従者に用意させる馬もKatherinaを連れ去るときにPetruchioが用意していた病気持ちのびっこの老馬ではなくまっとうな馬であることが推察できる．

VII.

Paduaに戻る途上でもPetruchioの横暴は続いている． Petruchioは太陽をさして月と呼びKatherinaが間違いを訂正すると何にでも逆らうなら引き返すと言って怒り出す． 明々白々とした間違いを押し通し他者に訂正されると怒り出すのは駄々っ子を連想させる． 仕立て屋の場面でさんざん難癖をつけて仕立て屋を追い返した後で傍白で Hortensio に明日代金を払う旨を仕立て屋に伝えてくれるように頼むのを見たときにPetruchioの成長を感じた観客はここでまだPetruchioが横車を押そうとするのを見ると幻滅を感じる． 帽子屋や仕立て屋を追い返して普段着のままで Baptista の邸に行くことを提案する Petruchio の主張には一理あった． “ ’tis the mind that makes the body rich,/. . . / . . . honor peereth in the meanest habit”(4.3.166-68)というPetruchioの主張は真理を突く言葉でもあるからだ． それに対して太陽を月と呼ぶことは単なるゴリ押しに過ぎない． それどころか “It shall be moon or star or what I list”(4.5.7)という Petruchio の言葉は事実に基づこうと基づかなかろうと自分の言うことは正しいのだと主張している． しかしPetruchioのこの言葉は暴君の言葉を連想させるが同時に Petruchio の譲歩を示唆する言葉でもある． ４行目で “I say it is the moon that shines so bright”(4.5.4)と言ったときには理由を述べて月だと主張することによって月以外の可能性を否定していた． ところが７行目で “moon or star or what I list”と言うことはそれが “moon”でない可能性を Petruchio 自身が容認していることを示唆している．

とするならば “It shall be moon or star or what I list”という言葉を通して Petruchio が Katherina に伝えたいのは “It is the moon”という事実ではなくてこの後に続く “Evemore crossed and crossed, nothing but crossed!”(4.5.11) に主眼があるのではないか．換言するならば Petruchio の言いたいことは，空に輝いている天体が月であるか太陽であるかといった事実の確認にどれほどの意味があるのか，空に美しく輝く天体があるという事実を共通の認識とするだけで十分ではないのか．縁あって夫婦になった以上，これから二人三脚でやって行かなければならない．そのときに事実の細かな区別立てをしていれば前に進めないではないか．事実の大本を確認すれば瑣末な詮議立てをするのは止めて前に進もうということではないだろうか．Katherina の “Forward, I pray, since we have come so far. /And be it moon or sun or what you please”(4.5.12-13)は Petruchio の真意を理解した上での発言であり Hortensio の忠告に従って前に進むために相槌を打ったのではない．この後 Petruchio と Katherina の間では次のようなやり取りがなされる：

Petruchio: I say it is the moon.
Katherina: I know it is the moon.
Petruchio: Nay then you lie, it is the blessed sun.
Katherina: Then God be blessed, it is the blessed sun.
But sun it is not, when you say it is not,
And the moon changes even as your mind.
What you will have it named, even that it is,
And so it is for Katherine. (4.5.16-22)

上に引用した Petruchio と Katherina のやり取りの特に最初の部分は *Hamlet* ３幕２場の Polonius と Hamlet の次のやり取りと酷似している：

Polonius: My lord, the queen would speak with you, and presently.
Hamlet: Do you see yonder cloud that’s almost in shape of a camel?
Polonius: By th’mass, and ’tis like a camel indeed.
Hamlet: Methinks it is like a weasel.
Polonius: It is backed like a weasel.
Hamlet: Or like a whale?
Polonius: Very like a whale. [29)]

Hamlet は自分が何を言っても Polonius が同意するのを聞いて Polonius が本心から同意しているのではなく相槌を打ってさえおけば彼の心を御することができると思っていると感じて憤慨する：“They fool me/ to the top of my

bent”(3.2.345-46)４幕５場で Katherina が示している反応は Polonius と同じように見える． それどころか “But sun it is not, when you say it is not,/ And the moon changes even as your mind”という言葉は Katherina が Petruchio の言葉を額面通り受け取っているわけではないけれどあなたの言うことに同意しましょうと言う非常に皮肉を込めた言葉である． Hamlet も Petruchio も共に言葉の達人である． Hamlet が自身の気持ちを押し殺して彼の意に沿うように努力した Polonius の応答を聞いて馬鹿にされていると感じ Petruchio が皮肉の込められた Katherina の言葉を聞いて納得するのは何故だろうか． Polonius が自分の気持ちを押し殺してまで Hamlet に同調しようとするのは Hamlet にヘソを曲げられて彼が Gertrude の命令を果たせなくなるのを恐れるからである． 反対に Katherina が彼女の皮肉を込めた言葉を通して言おうとしているのは， 今私たちにとって一番大事なことは前進することです． 私は空に輝く天体があなたの言うように月だとは思っていませんが目的遂行のためにはそんな些細な詮議立てをするのは止めて代わりにあなたが呼んだものだと “suppose”する “game”だと考えましょう． game をするのですからあなたがそれを月と呼ぼうと太陽と呼ぼうと， はたまたその他の名前で呼ぼうと構いませんということである． Katherina の言葉にはたっぷり皮肉が込められているし彼女が全面的に彼の見解に同調しているわけでないことは Petruchio も十分に理解している． しかしそれでも Petruchio が Katherina の言葉に納得するのは協力し合って前進するという基本路線の合意が得られたからである．

この後に続く， 年配の男性をうら若き女性扱いするエピソードは上記の空に輝く天体に関するエピソードのヴァリエーションである． まず Petruchio が年配の男性に若い女性にするような挨拶をして次に Katherina にも同様の挨拶をさせる． Katherina は先のエピソードで Petruchio の game のやり方を学習したので彼女自身の番になると彼をはるかに凌ぐ堂に入った挨拶をするし Petruchio の気が変わりこの方は年配の男性だと言うと丁重に謝罪する． ここで重要なのは Katherina の謝罪に続いて Petruchio 自身も謝罪していることである： “Do, good old grandsire”(4.5.50) もう１つ重要なのはこの年配の男性が妻の妹の結婚相手である Lucentio の父の Vincentio だと知ったときに年長者に対する礼を尽くすことである： “And now by law as well as reverend age/ I may entitle thee my loving father./ . . . / Let me embrace with old Vincentio”(4.5.60-61, 68.) Katherina に求婚に行ったときにも結婚式の当日も Petruchio は Baptista のことを “Father”と呼んではいたものの家父長に対する礼を尽くしてはいなかった． 式では神父を殴るし式後には寺男に酒浸しのケーキ片を投げつけて神聖冒涜の行為を働いたほどである． Katherina との間で夫婦としての今後の歩み方に折り合いがつき， 前進するために双方が互いに瑣末なことに目をつぶることに合意したときに初めて Petruchio は彼自身の非を認め家父長に対する尊敬の念を表すことができる． Burt の指摘するよ

うに[30]謝罪の必要があるのは彼らの game が好戦的であるだけでなく社会の秩序を転覆させる危険性(subversiveness)を帯びたものだからである．彼らがここで家父長に謝罪することによって *The Shrew* の筋は subversiveness を抑制する方向に向かうことができる．

Lucentio の邸の前に着いた Petruchio と Katherina は Baptista のお気に入りで Katherina にとっては癪の種であった Bianca が駆け落ち騒動を起こしているのを知る．Katherina が Petruchio に事態の展開がどうなるか見に行くことを提案すると Petruchio はキスをねだり，してくれないなら引き返すと言う．これは太陽を月と呼んだり年配の男性を若い女性扱いする行為の単なる延長線上にある行為ではない．New Cambridge の注が指摘するように[31]Katherina がここで初めて Petruchio を "love"(5.1.123)と呼ぶことは彼女が進んで Petruchio のパートナーになろうとする気持ちを表している．またここでのキスは前進するための手段としての合意が心が通い合ったものに転じていることを象徴している．

VIII.

もし *The Shrew* が５幕１場の終わりで Petruchio の求めに応じて Katherina がキスするところで終わっていたならば *The Shrew* を romance と呼ぶのは容易である．問題はこの後５幕２場の Lucentio 邸の宴会で Petruchio が妻たちを "hawk"(5.2.72)か "hound"(5.2.72)扱いして彼女たちの "duty"(5.2.125)についての賭けを始めることである．なるほど賭けを提案したのは Petruchio であるにしても宴会の話題が "shrew"を中心に展開し Katherina が Widow に露骨な当てつけ―"Your husband, being troubled with a shrew,/ Measures my husband's sorrow by his woe"(5.2.28-29)―を言われ，Petruchio 自身も Tranio に " 'Tis thought your deer does hold you at bay"(5.2.55)と言われることを考慮に入れるならば，たとい賭けに訴えても Katherina がもはや shrew ではないことを周囲の人々に印象付けることは Petruchio だけでなく Katherina の名誉を守ることにもつながるという議論が成立する．それに賭けを提案するのは Petruchio でも居合わせた男性たちみんなが賛成し，宴会に付き物の余興の範囲内で行われるから目くじらを立てるほどのことはないと言えるかも知れない．上記のような理由から賭けそのものと romance は必ずしも矛盾するものではないと言えるかも知れない．

しかし Petruchio は賭けに勝ち Katherina の obedience を証明するのに成功し Baptista から "another dowry to another daughter"(5.2.14)を得てもそこで終わりにしない．それどころか Baptista の申し出に対して "Nay, I will win my wager better yet"(5.2.116)と言う．Petruchio のもっと賭け金を獲得するという宣言は１幕２場の "I come to wive it wealthily in Padua"を想起させる．Petruchio の Katherina に対する関心は金目当てで出発しても Katherina を知るにつれ Petruchio の関心が金から彼女の lustiness に移行し，

寒さや断食や不眠の苦しみを共有することを通して “At last, though long,[their] jarring notes agree”(5.2.1)だと信じてきた観客は冷や水を浴びせられた気持ちになる．そして Katherina が Petruchio に命じられた通りに Bianca と Widow を引き連れてきて Petruchio に命じられるままに帽子を踏みつけるのを見ると，こんな “silly pass”(5.2.124)を “duty”と呼ぶなんて何と馬鹿げたことかと思う．しかしここで Katherina が踏みつけるように命じられているのが帽子だということは注目に価する．Katherina は帽子やガウンのような瑣末なものへのこだわりを捨てることと引き換えに Padua に戻るという大きな目的を果たすことができた．彼女にとって帽子とは言わば大きな目的のために犠牲にすべき小さなものの象徴である．Katherina が Petruchio の命令に従って帽子を踏みつけるのはこの行為の背後には大きな意味が隠れているのだよという Petruchio の沈黙の声を聞くからである．New Cambridge の注によれば [32]多くの舞台においてここで Katherina が身に着けているのはまさに４幕３場で彼女に与えられなかった帽子とガウンである．４幕３場で Katherina が “gentlewomen wear such caps as these”だから自分もこの帽子が欲しいと主張したときに Petruchio は “When you are gentle, you shall have one too”と答えていたがここで Katherina がその時に欲しがった帽子をかぶっているなら Petruchio は約束を守ったことを示唆している．もしそうであるならば大きな目的を達成した暁にはまたその帽子を手に入れられることが予想されるのでそれだけ Katherina は Petruchio の命令に従いやすくなる．

最大の難関は Katherina の obedience speech をどう解釈するかである．この speech は批評家たちの間で論争の的になってきた．Boose らは [33]bullying husband に tamed されたと解釈する．Heilman は “automatic statement”[34]だと解釈する．それに対して Nevo は “there is more than a homily for Elizabethan wives”[35]だと主張する．Smith は [36]parody だと考える．Crocker や Novy や Miola は [37-39]passivity の外観を取りつつもむしろ power を行使していると考える．Kahn は“It is Kate’s submission to him that makes Petruchio a man”[40]とまで述べている．この speech に直接言及していないが Goddard も “And the play ends with the prospect that Kate is going to be more nearly the tamer than the tamed”[41]と述べている．また Zajko はこれらのどのグループにも属さない見解を持ち “Her final public statement and Petruchio’s recognition of its value is evidence of a process of significant and mutual change”[42]と主張している．

５幕２場１３６行から１７９行にかけての Katherina の speech は夫を “thy lord, thy king, thy governor”(5.2.138)と呼び “And place your hands below your husband’s foot./ In token of which duty, if he please,/ My hand is ready, may it do him ease”(5.2.177-79)で終わっている．字面だけを考えるならこの speech をするときの Katherina は “a second Grissel”(2.1.284)である．しか

し Novy らが指摘するように[43]この speech をするときの Katherina は obedience のイメージからほど遠く舞台中央に位置して観客はもとより舞台上の宴会出席者全員の注目を浴びる．しかも obedience を説く Katherina のセリフは *The Shrew* の中で他のセリフを引き離して長い．弁論は shrew の属性の１つであり沈黙は obedience の属性である．Martins らが主張するように[44]皮肉なことにも obedience を説く Katherina が雄弁で夫たちの呼び出しに応じない shrew の Bianca と Widow は沈黙を守る．以上の点を考慮に入れるなら Katherina の speech を額面通りに受け入れることには問題があることがわかる．そして額面通りに受け取る危険性を考慮に入れてその speech を再度検討するとその speech はきわどい部分を含んでいることがわかる：

> Thy husband is thy lord, thy life, thy keeper,
> Thy head, thy sovereign; one that cares for thee
> And for thy maintenance; commits his body
> To painful labour both by sea and land,
> To watch the night in storms, the day in cold,
> Whilest thou li'st warm at home, secure and safe.　(5.2.146-51)

この箇所について Bean は[45] *The Taming of a Shrew* の中には夫の妻に対する duty に言及する箇所はなく，もっぱら女性の罪が強調されているのに対して *The Shrew* では女性の罪への言及はなくて結婚における相互の義務が強調されていることを指摘している．鋭い指摘であるが Verona 途上のぬかるみで Katherina が馬の下敷きになってもがいていたときに Petruchio が助けに行かなかったことや Petruchio の邸で Katherina には食事も睡眠も与えられなかったのを見てきた観客には上記に引用した箇所は mutuality の強調にとどまらず夫の義務について Petruchio に釘を刺すセリフと感じられるのではないだろうか．Padua 途上で太陽を月と呼ぶ game を通じて Petruchio が Katherina に夫婦が協力して大きな目標に向かって前進するためには瑣末な犠牲には目をつぶらなくてはならないことを教えたときに Katherina は Petruchio の game の rule に則って彼の主張を受け入れる代わりに "And be it moon or sun or what you please; /And if you please to call it a rush-candle,/ Henceforth I vow it shall be so for me"と皮肉を込めた返答をすることで Petruchio に一矢報いた．obedience を説く Katherina の speech の中で彼女がしていることはその game の延長線上にある．Katherina の obedience を宴会出席者たちに示すという夫婦共通の目的のために Katherina は Petruchio の指示に従って obedience についての speech をする．Padua 途上で Petruchio の指示に従って年配の男性に若い女性に対する挨拶の言葉をとうとうと述べたようにここでもとうとうと

speech をする． しかしだからと言って Katherina が Petruchio の言いなりになっているわけではなく共にぬかるみや断食や不眠を経験してきた相手にだけわかる言葉で mutuality に言及することによって彼女なりのメッセージを Petruchio に送っているのである．

Katherina は “And place your hands below your husband’s foot,/ In token of which duty, if he please,/ My hand is ready, may it do him ease.”(5.2.177-79)という言葉で彼女の speech を締めくくっている． そのセリフを聞いた Petruchio は “Why, there’s a wench! Come on and kiss me, Kate.”(5.2.180)と言う． Katherina の obedience speech 特にその締めくくりの言葉が夫婦間の主従関係をこの上もなく明確にする形式ばった言葉であるのに対してそれを受ける Petruchio のセリフはむしろ frank で対等に近い夫婦関係を示唆しているような響きがする． Petruchio と Katherina のセリフの落差を念頭において Katherina の speech の締めくくりを検討し直すと奇妙な pause が存在することに気づく． すなわち “And place your hands below your husband’s foot.”の後に “In token of which”から始まる文を続けるときに Katherina は “In token of which duty my hand is ready, may it do him ease.” と一気に言わないで “In token of which duty”で１回切り “My hand is ready. . . ”という前に “if he please”を挿入しているのである． frank で対等に近い夫婦関係を示唆しているような響きがする Petruchio のセリフから判断すれば彼は Katherina が “place [her] hands below [his] foot”することを望まないことが推察できる． ここで Katherina が “if he please”を挿入した意図は何だろうか．

先に obedience speech の中で Katherina がしていることは game の延長線上にあり Petruchio の仕掛けた game の rule に則ってとうとうと speech をしながらも夫婦の mutuality に言及することによって夫の義務について Petruchio に釘をさしていると述べた． obedience speech の締めくくりで “In token of which duty”と “My hand is ready, may it do him good”の間に “if he please” を挿入することによって今度は Katherina の側が game を仕掛けているのである． すなわち “if he please”という言葉を通して Katherina は妻の obedience を衆人の前で証明するという夫婦共通の目的のために私は pround-mindedness を捨ててあなたの命令に従いました． 夫婦が二人三脚で前進していくためには mutuality が欠かせませんがあなたは私があなたの足元に平伏すことをお望みですかと問いかけているのである． Petruchio は Katherina の意図を正確に理解し， 彼女から投げかけられたボールを見事に返す： “Why, there’ a wench! Come and kiss me, Kate”婚約の場面で Katherina が Petruchio の “And kiss me Kate”(2.1.313)という注文に応じなかったのと対照的にここで衆人の前でキスすることによって Petruchio と Katherina は心が結ばれていることを衆人に示し， 宴会に集まった者たちの

祝福を受ける．３幕２場では Petruchio と Katherina は彼らのために用意された披露宴に出席しないで宴会のために集まった人々を後に残して去って行った．obedience speech の後でも Petruchio と Katherina はまだ宴会が続いているときに出て行く．しかし３幕２場と５幕２場では出て行き方が違う．３幕２場では集まった客達と食事や余興を共にすることを完全に否定して集まった客達の笑い種になりながら去って行ったのに対して５幕２場では大いに “sit and sit, and eat and eat!”(5.2.12)を楽しんだ後で皆の祝福を受けて新床に向かうのである．Katherina のことを何も知らずに彼女と結婚することを決めたときには金目当てであった Petruchio の結婚目的が彼女の人柄を知るにつれて “lusty wench”と会って話をしたいという目的に変わって行ったように Petruchio は obedience speech の前には “I will win my wager better yet”と言っていたが劇の終わりで皆の祝福を受けて新床に向かうときにはもっと賭け金を儲けることなどすっかり忘れていることも重要である．劇の初めで見られたような Petruchio の convention との対立は劇の終わりでは鳴りを潜めているのである．

結び

The Taming of the Shrew の中の Katherina の transformation は批評家たちの間でしばしば議論されてきた．それに対して Petruchio の transformation を取り扱った批評家はほとんどいない．しかし *The Shrew* の中での Petruchio と Katherina の出会いを通して変化するのは Katherina だけではない．Petruchio の結婚目的からして Katherina に会う前は金目的であったのが彼女の人柄を知るにつれ “lusty wench”と会って話をしたいという目的に変わる．また Petruchio は “peremptory”で “rough”でありさえすれば Katherina を簡単に口説き落とせると思っていたが彼の強引過ぎる押しが嫌われて Katherina に殴られたときには平静を失って “I swear I’ll cuff you if you strike again”と言ってしまう．Katherina にすかさず “If you strike me, you are no gentleman”と言い返されると Petruchio は gentleman であり続けるためには力の行使に頼ることは間違っていることに気づかされ，いわゆる Petruchio の taming school では あくまで“in reverent care of her”という名目が通用する範囲内で taming する．

Petruchio の邸に向かう途上での lesson も含めて taming school では lesson を受けるのは Katherina だけではない．Petruchio も Katherina と寒さや断食や不眠の苦しみを共有する．自らもぬかるみの寒さを経験することを通して Petruchio は従者を先にやり新妻のために部屋を暖めさせる思いやりを身につけ，また断食と不眠の苦しみを通して他者への思いやり－仕立て屋に代金を払うことを約束する－が芽生える．そして Padua に戻る途上で Katherina に夫婦で前進する共通の目的のためには瑣末なこだわりを捨てなくてはならないことを教えるときには反対に Petruchio 自身も Katherina の皮肉を込めた言葉

を受け入れなくてはならないことを学ぶ．また年配の男性を若い女性扱いしてからかった後では Petruchio 自身も非礼を詫びている．こうして少しずつ custom を受け入れる心準備が整った Petruchio はこの劇の終わりの Katherina の obedience speech の終わりでは Katherina の側から仕掛けられた game で彼女が投げた球を見事に受け止めて衆人の前で２人の息の合ったところを証明し皆に祝福されて新床に向かうのである．

劇の題の *The Taming of the Shrew* の shrew は一義的には Katherina を指すが Petruchio は Katherina と出会うことによって彼女に取りつかれ―“Petruchio is Kated”―彼女を上回る shrew になる．しかし Petruchio の taming school で Katherina と苦しみを共にすることによって Petruchio 自身も成長する．Grumio の言う通り “. . . winter tames man, woman and beast”(4.1.17)なのである．

注

1) Ann Thompson, introduction, *The Taming of the Shrew*, by William Shakespeare, updated ed., The New Cambridge Shakespeare (1984; Cambridge: Cambridge UP, 2003) 25-41.

2) George Bernard Shaw, *Saturday Review*, November 6, 1897; *Shaw on Shakespeare: An Anthology of Bernard Shaw's Writings on the Plays and Production of Shakespeare*, ed. Edwin Wilson, Penguin Shakespeare Library (Middlesex: Penguin, 1961) 198.

3) William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*, ed. Ann Thompson, updated ed., The New Cambridge Shakespeare (1984; Cambridge: Cambridge UP,2003) １幕１場８８行．テキストはこれを用いた．以下このテキストからの引用は全て本文中の括弧内に幕，場，行を記すに留める．

4) Cecil C. Seronsy, “ ‘Supposes’ as the Unifying Theme in *The Taming of the Shrew*,” *Shakespeare Quarterly* 14 (1963): 19.

5) Ruth Nevo, *Comic Transformations in Shakespeare* (London: Methuen, 1980) 39.

6) Marco Malaspina, “Are Happy Families All Alike?: The Strange Case of Dr. Petruchio and Ms. Katherine,” *Reading the Family Dance: Family Systems Therapy and Literary Study* ; *Shakespearean Criticism* 97 (2006): 315.

7) Nevil Coghill, “The Basis of Shakespearean Comedy: A Study in Medieval Affinities,” *Essays and Studies 1950: Being Volume Three of the New Essays and Studies Collected for the English Association*, ed. G. Rostrevor Hamilton, (London: Murray, 1950) 11-12.

8) Ralph Berry, *Shakespeare's Comedies: Explorations in Form* (Princeton: Princeton UP, 1972) 54-71.

9) Alexander Leggatt, *Shakespeare's Comedy of Love* (New York: Methuen, 1974) 58-62

10) John C. Bean, “Comic Structure and the Humanizing of Kate in *The Taming of the Shrew,*” *The Woman's Part: Feminist Criticism of Shakespeare*, ed. Carolyn Ruth Swift

Lenz, Gayle Greene and Carol Thomas Neely (Chicago: U of Illinois P, 1980) 72.

11) Richard A. Burt, "Charisma, Coercion, and Comic Form in *The Taming of the Shrew*," *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts* 26 (1984): 300-301

12) Brian Morris, introduction, *The Taming of the Shrew*, by William Shakespeare, The Arden Shakespeare (1981; Shingapore: Thomson, 2002) 129.

13) Jeanne Addison Roberts, "Horses and Hermaphrodites: Metamorphoses in *The Taming of the Shrew*," *Shakespeare Quarterly* 34 (1983): 159-71.

14) Joseph Candido, "The Starving of the Shrew," *Colby Quarterly* 23 (1990): 96-111.

15) Vanda Zajko, "Petruchio is 'Kated': *The Taming of the Shrew* and Ovid," *Shakespeare and the Classics*, ed. Charles Martindale and A. B. Taylor (Cambridge: Cambridge UP, 2004): 33-48.

16) Thompson, 100.

17) Thompson, 101.

18) Ralph Berry, *Shakespeare's Comedies: Explorations in Form* (Princeton: Princeton UP, 1972) 66.

19) Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, Phoenic Books, 2vols. (Chicago: U of Chicago, 1951) 1: 70.

20) Robert Crosman, *The World's a Stage: Shakespeare and the Dramatic View of Life*, (Maryland: Academica, 2005) 35-36.

21) Morris, 132.

22) Thompson, 119.

23) Thompson, 28.

24) E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Early Comedies* (New York: Barnes & Noble, 1965) 82.

25) Candido, 108.

26) Thompson, 28.

27) Edward Berry, *Shakespeare and the Hunt: A Cultural and Social Study* (Cambridge: Cambridge UP, 2001) 99.

28) Crosman, 337.

29) William Shakespeare, *Hamlet, Prince of Denmark*, ed. Philip Edwards (Cambridge: Cambridge UP)３幕２場３３９－４４行.

30) Burt, 302.

31) Thompson, 153.

32) Thompson, 159.

33) Lynda E. Boose, "Scolding Brides and Bridling Scolds: Taming the Woman's Unruly Member," *Shakespeare Quarterly* 42 (1991): 179-194.

34) Robert B. Heilman, "The Taming Untamed, or the Return of the Shrew," *Modern Language Quarterly* (1966): 159.

35) Nevo, 38.

36) Amy L. Smith, “Performing Marriage with a Difference: Wooing, Wedding, and Bedding in the *Taming of the Shrew*,” *Comparative Drama* 36(2002-03): 38.

37)Holly A. Crocker, “Affective Resistance: Performing Passivity and Playing A-Part in *The Taming of the Shrew*,” *Shakespeare Quarterly* 54 (2003): 155-56

38) Marianne L. Novy, “Patriarchy and Play in *The Taming of the Shrew*,” *English Literary Renaissance* 9 (1979): 276-77.

39) Robert S. Miola, “The Influence of New Comedy on *The Comedy of Errors* and *The Taming of the Shrew*,” *Shakespeare’s Sweet Thunder: Essays on the Early Comedies* ed. Michael J. Collins (Newark: U of Delaware P, 1997) 29.

40) Coppelia Kahn, *Man’s Estate: Masculine Identity in Shakespeare* (Berkley: U of California P, 1981) 117.

41) Goddard, 68.

42) Zajko, 43.

43) Novy, 266-67.

44) Maria Lucia Milleo Martins, “*The Taming of the Shrew*: Shakespeare’s Theater of Repetition,” *Foreign Accents: Brazilian Readings of Shakespeare*; *Shakespearean Criticism* 117(2009): 293.

45) Bean, 68.